

1 『カトリック教会のカテキズム』は、教会法第207条を引用しつつ、次のように定義している。「1934『教会において、神の御命によってキリスト信者のうちに、法的に聖職者と呼ばれる聖務者があります。他は信徒と呼ばれます。また、このいずれかに属するキリスト信者で、福音的勧告の誓願により神に自らを奉獻し、教会の使命に奉仕する者がいます。このようにキリスト信者は、教会法上、信徒と聖職者の二つに分類されている。聖職者とは叙階された奉仕者、つまり助祭、司祭、司牧、司教のことである。修道者の中には、信徒として奉獻生活をしている人々と、聖職者として奉獻生活をしている人々とが存在する。」

「神の民」としての歩みは信徒として始まる。ぶどうの木につながれた枝は、木そのぶどうの枝にたとえられる人間は、木であるキリストと結ばれることによって「神の民」

のたえは、(中略)とくに信徒にあてはまる「(信徒の召命と使命15)のである。これらすべて、信徒にも向けられているのであるが、「地の塩、世の光、パン種などの福世の光、地の塩として(マタイ5:13-16参照)、全世界に派遣されている」(教会憲章9)。の交流のためにキリストによって設立され、すべての人のあがないの道具として採用され、始められたが、さらに拡張されるべきものである。(中略) この民は、生命と愛と真理ハネ13:34参照)。さらに、この民は、神の国を目的とし、その国は神自身によって地上にキリスト自身がおられるように愛せよとの新しいおきてを律法として持っている(ヨハネ1:1-14参照)。すなわち、「この民は、神の子らとしての品位と自由を備え、かれらの心の中には、あたかも神殿の中におけるように、聖霊が住んでいる。この民は、キリストについて言われたすべてのことは、信徒、修道者、聖職者に平等に向け

キリスト者である」(教会憲章31)。
 者となり、教会と世界の中で自分の本分に依りてキリストを信する民全体の使命を果たす神の民に加えられ、自分たちの様式においてキリストの祭司職、預言職、王職に参与する外の、すべてのキリスト信者のことである。すなわち、洗礼によってキリストに合体され、

「信徒とは、聖なる叙階を受けた者ならびに教会の中に認可された修道身分に属する者の信徒について、『教会憲章』は次のように述べている。その異なる立場や任務により、一般に信徒・修道者・聖職者に分類されてきた。そのうち(新教会法典第208条)。しかしその働きは「それぞれ固有の立場と任務に応じて」(同上)行われ、キリストにおける新生のゆえに、尊厳性においても行為においても真に平等である」(新教会法典第208条)。
 このようにして作られた目に見えるキリストの教会を構成する「すべてのキリスト信者は、(同上)されたのである。」

り、一致と平和の源であるイエスを信じ仰ぐ人々を一つの集団に招き集めて、教会を設立を望んだ」(教会憲章9)。そこで父なる神はひとり子イエスを世に送り、「救いの作者であなく、かれらを、真理に基づいて神を認め忠実に神に仕える一つの民として確立すること人類の救いを望まれた神は、「人々を個別的に、全く相互の連絡なしに聖化し救うのでは

2) 教会における信徒

弁護者である霊の導きのもとに続けることである」(現代世界憲章3)。
 御父の無限の愛に始まりキリストによって実現された救いの業は、「からし種」「パン種」のたとえにあるように、まだ全体に行きわたってはいないが完成に向ってすでに始められた。またその業は、世界全体におよぶとともに一人ひとりの現実にも具体的にも働きかけるものである。地上を旅する教会は、その神の愛に依りてこの役割を受け継ぎ、終わりの日まで働く。その働きはこの世から切り離されたものではなく、歴史を歩みつつある人間の現実のまっただ中に働きかけ、世そのものを変革するよう招かれているのである。